

## 進化経済地理学における時間と歴史

外栞保, 大介  
九州大学大学院基幹教育院

<https://doi.org/10.15017/7178828>

---

出版情報 : 史淵. 161, pp.93-112, 2024-03-18. Faculty of Humanities, Kyushu University  
バージョン :  
権利関係 :



# 進化経済地理学における時間と歴史

外柁保 大 介

## I はじめに

進化経済地理学は、進化経済学を含む広範な進化的な着想や概念を経済地理学に摂取し、最近の約20年間で成長を遂げてきた新たな研究潮流である。これまでも進化経済地理学の概説的なレビューは、外柁保（2012）や野尻（2013）、Boschma and Frenken（2018）などによってなされてきた。進化経済地理学の特徴は、第1に進化論的観点をもつ様々な学問領域の概念の適用を試みること、第2に変化の過程やメカニズムを強調すること、第3に地域が変化するとき進化論の特徴を有するかどうかという点に強い関心があることにまとめられる（外柁保 2012）。このように進化経済地理学は、地域の変化に対して時間や歴史に関わる概念や手法を用いながら説明を試みており、これは類似した着眼点をもつ歴史地理学や時間地理学に並んで際立った観点であるといえる。

これまでも「地理と歴史は経済過程を理解する鍵」（Garretsen and Martin 2010: 130）という主張がしばしば表明されてきたように、経済地理学において時間や歴史を意識したアプローチは、進化経済地理学以前においてもみられてきた。過去の状況が現在のそれに影響を及ぼすことに言及した素朴な議論として、地理的慣性（山口1965; 脇田1990）や、書かれた文字を消して別の内容を上書きした羊皮紙の写本を歴史の積み重ねになぞらえたパリンプセスト palimpsest のメタファー（Harvey 1997; Mah 2012; Storm 2014）が挙げられる。また、理論的には、たとえば経済学の累積的因果連関（Myrdal 1957; Kaldor 1978）やプロダクトサイクル（Vernon 1966）を援用して、経済地理学でも経済発展の地域的・時間的な差異をめぐった議論がなされてきた。

かつて Lui (2009: 23) は、「歴史的時間における経済地理学の進化を、論理的な時間だけでなく、歴史的な文脈にも位置づけるべき」と述べ、これは進化経済地理学における時間と歴史の両観点の意義を強調した先駆といえる。その後も、進化経済地理学では、これまでの研究成果を時間や歴史の取り扱い方に注意を払いながら整理する取り組みが Henning (2019) や Martin and Sunley (2022) によって進められてきた。そこでこれらを手掛かりとしながら、本稿は進化経済地理学における時間や歴史を用いた様々なアプローチを整理し、方法論上の再検討を図ることを目的にした。進化経済地理学の議論を一旦棚卸して、地域の発展や衰退に関わる時間や歴史の取り扱い方を再考することは、進化経済地理学の方法論に示唆を与えることが期待される。

本論に入る前に辞書的な定義<sup>1</sup>を確認しておく、時間とは「出来事が過去から現在、そして未来へと明らかに不可逆的に連続して起こる非空間的連続体」や「この連続体上の2点を区切る区間」を意味し、歴史とは「出来事を時系列的に記録したもの」や「過去の出来事を記録し分析する知識の一分野」を意味する。本稿で論じる時間と歴史の相違について、Henning (2019) は、抽象と現実のマトリックスと組み合わせて表1にまとめている。Henning (2019) によると、時間は、絶対的な意味で時間の長短という観念がほとんどない1次元の時間という抽象的な時間、あるいは日や週という単位の現実の時間という形に区

表1 時間・歴史と抽象・現実のマトリックス

	抽象	現実
時間	「研究上の時間」(Corpataux and Crevoisier 2007)	時 日 週 年間 (例: 1900~1980年)
歴史	産業ライフサイクル 連続モデル: 技術シフト、長期 複雑モデル (Martin and Sunley 2007)	「時間的な知恵」 産業革命 技術拡散の経験的知識 制度変化の経験的知識

(Henning 2019: 603による)。

<sup>1</sup> The American Heritage Dictionary of the English Language による。

分され、また、歴史は、技術シフトなどの経済史や歴史経済学で用いられる理論的歴史区分のような抽象的な歴史、あるいは経済が発展する現実的かつ文脈的な歴史的期間である現実の歴史に区分される。現実の歴史は、「地理的な知恵」を求める Boschma (2017) になぞらえて、「時間的な知恵」として呼称できると論じられている (Henning 2019)。さらに、Henning (2019) は、進化経済地理学では、イノベーションの創出や拡散には時間の経過を要するため時間を摩擦要因として捉え (Lee and Saxenian 2008)、産業や地域の歴史を文脈理解のために用いられてきたことを踏まえて、進化経済地理学を、時間と歴史、抽象と現実のマトリックスで反復しながら実践する手法と位置付けている。

## II 時間

### 1. 地域レジリエンスと履歴効果

進化経済地理学の論題の1つとして、不況などの危機によって生じた地域的な回復過程を考察する地域レジリエンスがある。地域経済に打撃を与える危機は、Pendall et al. (2010) によって、外生的で短期間に生じるショックと、内生的で緩やかな影響をもたらすローバーンの2つに類型化された。これにより、短期的・一時的な影響を与えるショックと、長期的・持続的な影響を与えるローバーンが峻別され、影響の持続期間の長さという時間に焦点が当てられたとみることができる。地域レジリエンスの実証研究では、単一のショックとその回復過程を分析するだけではなく、複数のショックと回復過程を捉えて長期的に検討する研究もみられ (Fingleton et al. 2012; Cellini and Torrissi 2014; Martin et al. 2016)、地域レジリエンスを地域の長期的進化に接続した議論への展開も進んでいる (Martin and Sunley 2015a; Boschma 2015)。

地域に打撃を与える危機は、履歴効果を伴うことが少なくない。経済学において履歴効果とは、「一時的な攪乱が経済の経路に恒久的な影響を与える状況」(ローマー 2010: 531) と定義され、ショックの悪影響が言及されてきた。これに対して、Martin (2012) は、ショックによって「創造的破壊」(Schumpeter

1942) が生じて雇用増加をもたらすような良い影響が起こりうる可能性もありうることを指摘した。そのうえで、過去のすべてが未来に影響を与えるのではなく、履歴効果を選択的な経路依存の過程とみなし、レジリエンスと履歴効果との概念を効果的に組み合わせることで、不況に対する地域経済の起こりうる反応の把握に貢献すると論じた。この議論を発展させて、Martin and Gardiner (2019) は、履歴効果による様式化された経路変化を図1に示している。彼らによると、Friedman (1993) のモデルでは、不況ショックは図1のb - c - dのV字型を描き、完全雇用成長経路 (a - b - d - e) に回帰するのに対して、履歴効果を考慮した Hamilton (1989) による説明では、不況の影響を受けるとパフォーマンスが一旦低下し、成長率を維持したまま c - f のような経路をたどる場合や、成長率も低下して c - g のようなネガティブな履歴効果を示す場合が想定されている。一方で、ショックが「創造的破壊」を引き起こすと、パフォーマンスが a - b の延長の経路よりも向上して c - d - h - i のような経路をたどる場合や、成長率も上昇して c - d - h - j のようなポジティブな履歴効果を示す場合も可能性としては考えられる (Martin and Gardiner 2019)。ただし、これらはもちろん様式化されたものであり、Cerra and Saxena (2008) による実証研究では Friedman (1993) 型の反応を示す国はほとんどなく、多くの

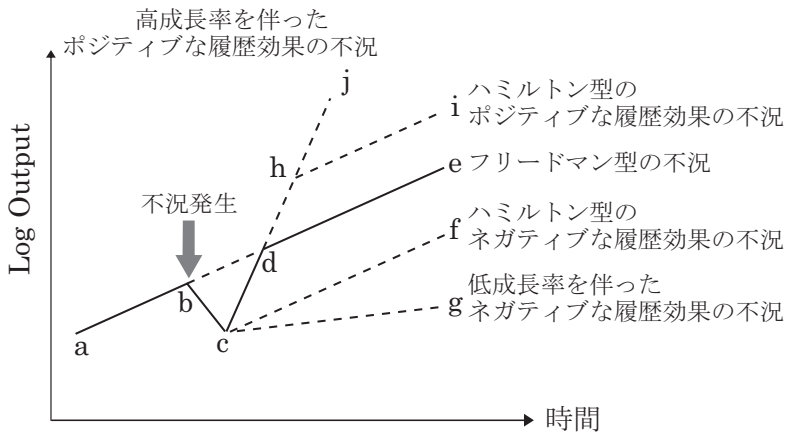


図1 不況からの回復の様式化されたタイプ (Martin and Gardiner 2019: 1806による).

場合、 $b - c - g$  や  $b - c - f$  の軌道を示すことが確認されている。

## 2. 一時性と機会空間

進化経済地理学では、経路創造という議論も活況を呈している。Martin and Sunley (2015b) は、多様性、選択、保持というネオダーウィニズムから、可塑性、頑健性、進化可能性、創発、ニッチ構築、自己組織化などの発展へ、進化経済地理学の着眼点に移りつつあることを「発展的転回」developmental turn と呼んだ。経路創造の原動力になる鍵概念が、アクターの意図や行動に関わるエージェンシー（行為主体性）である（Garud and Karnøe 2001, 2003）。エージェンシーは、経路を変化させる変化エージェンシーと、制度構成の維持や再生産に作用する再生産エージェンシーに分けられる（Bækkelund 2021）。地域の成長経路は、変化エージェンシーと再生産エージェンシーの相互作用の結果として生じてきたと捉えられている（Grillitsch and Sotarauta 2020）。経路の変化は、「構造の二重性」（Giddens 1984）を前提<sup>2</sup>として、構造とエージェンシーとの間の複雑な相互作用の結果とみなされる（Benner 2023）。この構造－エージェンシーを媒介するものとして、以下に示す一時性 temporality や機会空間 opportunity space という概念が開発されている。

### ① 一時性

波乱万丈で落ち着きがない資本主義社会の中で、時として一時的な特定の出来事により拡大的なダイナミクスが生じる場合がある（Sewell 2008）。一時的な出来事のうち、経路変化のターニングポイントとなるものは重大な岐路 critical juncture とよばれ、経路創造論ではその特定が焦点とされている（Sotarauta and Grillitsch 2023）。重大な岐路は、状況依存的 contingent な性格をもち、結果の自己強化的な性質が強調される（Ermakoff 2017）。Grillitsch et al. (2022) は、このような一時性を構造とエージェンシーに関する理論の重要概念であると位置づ

<sup>2</sup> 人文地理学における構造化理論の受容や批判的検討を取り扱った日本国内の研究として、森川（1992）、大城ほか（1993）、堤（1995）、野尻（2011）などが挙げられる。

け、近い将来と遠い将来におけるアクターの機会の認識と評価を指す「意図の一時性」と、行動の短期的・長期的な結果を指す「結果の一時性」に峻別することを主張した。意図の一時性は「個人レベルで行動を動機づける計画、目的、目標に関係する」のに対して、結果の一時性は「個人、組織、地域の各レベルで関連性」がある（Grillitsch et al. 2022: 111）。一般的に企業家活動が地域レベルでの変化につながるまでには8～10年を要し、意図の一時性が即座に結果として反映されることはあまりみられないため（Grillitsch et al. 2022）、意図の一時性と結果の一時性にはズレが生じることになる。彼らによると、変化エージェンシーには長期的な視点に立った意図が必要であるのに対して、再生産エージェンシーはしばしば短期的な意図の視点を持っていることが示唆され、不況のようなショックが生じると、本来必要な変化エージェンシーではなく、既存構造を再生産する短期的視野に立ったエージェンシーが奨励される傾向にある<sup>3</sup>と述べている（Grillitsch et al. 2022）。

## ② 機会空間

Markus Grillitsch を中心とする北欧諸国の研究者によって概念整理が進められているのが、機会空間である。機会空間は、重大な岐路が現れた時に、アクターに内生的あるいは外生的な変化を促す原動力になる機会を探索する空間である（Grillitsch et al. 2018; Grillitsch and Sotarauta 2020）。機会空間の特徴は、以下の3点にまとめられる。

第1に、機会空間は、立地機会の窓と関連した概念である。経済地理学では、ある地域での新産業が過去の空間構造や初期条件とは独立した好機によって形成されることを意味する「立地機会の窓」という概念が Scott and Storper (1987) や Storper and Walker (1989) によって提起されていた。Kurikka et al. (2023) は、立地機会の窓と対比させて、機会空間は連続的な時間的性質をもち、新しい産

<sup>3</sup> 企業城下町において中核企業の業績が悪化する大きな経済的ショックが生じた場合に、下請企業は中核企業からの依存脱却が求められるものの、短期間では抜本的な経営改革が困難で、現状維持の対応に終始してしまう状況に照応する（外戸保 2018）。

業・技術に限定されない概念であると位置づけている。

第2に、機会空間は、空間と産業構造の2つの次元から構成される (Grillitsch et al. 2018)。前者の空間は、知識の交換と学習のためのローカルアリーナである具体的な地理的空間と、特定の産業領域で使用・開発される知識と技術を指す抽象的な経済空間に分けられる (Grillitsch et al. 2018)。後者の産業構造は、地域の特化や関連多様性、非関連多様性に細分化される (Frenken et al. 2007)。

第3に、機会空間は、特定の地域・時間・エージェント<sup>4</sup>に固有なものと位置づけられている (Grillitsch and Sotarauta 2020)。このうち、地域の機会空間は、個々のアクターではなく地域に焦点を当てるため、様々なタイプの経路開発を含む機会に着目する (Kurikka et al. 2023)。また、時間固有の機会空間では、既存の知識や技術などや将来の市場予測に基づく特定時点における可能性を指し、現実の空間と抽象的な経済空間に対応する (Grillitsch et al. 2021)。さらに、機会空間はエージェントにも固有であり、エージェントの未来を見据えた地域の想像力と密接に結びついている (Kurikka et al. 2023)。

経路創造の議論では、イノベーションの創発や普及を正統化する過程が論点になっている。Jolly and Hansen (2022) によると、新産業の発展では、産業構造だけではなくイデオロギーや政治文化、政策の伝統などの政治的文脈も正統性に影響を与えることが示唆されている。この正統化に重要な役割を果たすのが、集団的な期待<sup>5</sup>やビジョンである (Gherhes et al. 2022)。Emirbayer and Mische (1998: 983-984) は、人間のエージェンシーを「単に過去のルーティンを繰り返す」ような「反復的次元」に限定するのではなく、期待を通じて未来の可能性に形や方向性を与える「思考と行動の新しい方向性」を生み出す「投影的次元」にもあると位置づけ、「未来への想像力豊かな取り組みも人間のエージェンシー

<sup>4</sup> アクターには、エージェンシーを発揮するものとそうでないものがあり、このうち前者はエージェントとして特定される。

<sup>5</sup> Steen (2016) は、科学技術社会学において科学技術の進展に対する期待やビジョンの役割に着目した「期待の社会学 Sociology of expectations」(Borup et al. 2006) を援用して経路創造を論じている。「期待の社会学」を紹介した鈴木 (2013) は、日本国内における関連した動向として、東京大学社会科学研究所における「希望学」(東大社研ほか 2009a, 2009b, 2009c, 2009d) の取り組みに言及している。

の重要な要素である」と主張した。エージェンシーを、反復的あるいは習慣的な側面である「過去」から情報を得ていながら、代替的な可能性を想像する投影的能力としての「未来」に向かって、また、これまでの習慣や将来のプロジェクトを文脈化する実践的-評価的能力として「現在」に向かって志向する、時間的に埋め込まれた社会的関与の過程として概念化している。集団的な期待やビジョンは、機会空間に影響を与え、経路開発するアクターに貢献したりもするし、逆に抑制したりもする「精神的な門番 mental gatekeeper」(Miörner 2022: 596) としての役割を果たす。

このような複雑な関係の機会空間を Kurikka et al. (2023) は、図2に示している。彼女らによると、過去の発展の軌跡や、現在の地域的な構造に埋め込まれた状況を前提として、知覚される機会空間を望遠鏡とプロジェクターというメタファーを用いて示しているのが特徴である。地域のエージェントは、それぞれが独自の社会的フィルターをもって機会の世界を「望遠鏡」を通して展望している。一方で、将来の期待やビジョンは何もないところから現れるものではなく、社会フィルターを通じて表出する。彼女らによると、社会フィルター

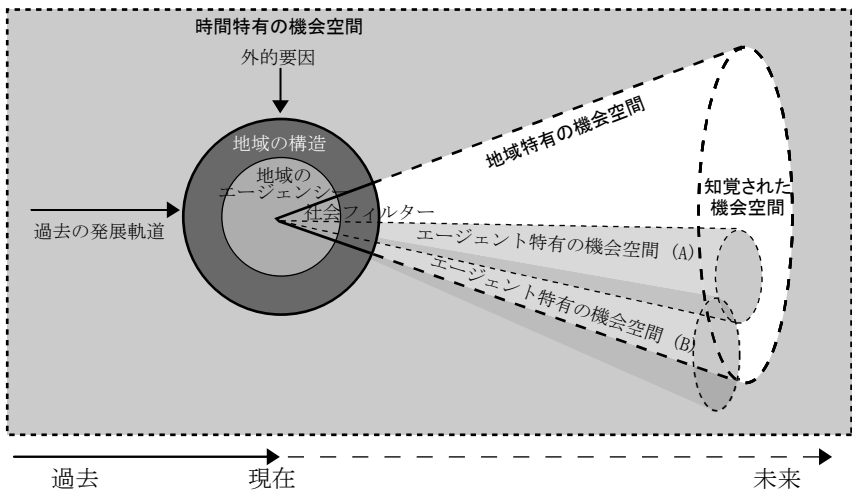


図2 機会空間の知覚  
(Kurikka et al. 2023: 1443による).

として、成長の論理、専門化、空間スケール、時間軸、進歩の規模、行動様式、機会の種類という7つが特定されている。この社会フィルターを通じて、「プロジェクト」のように積極的な努力と創造の結果として、図2の(A)や(B)のようなエージェント特有の機会空間が描かれる(Kurikka et al. 2023)。このように機会空間の概念は、構造とエージェンシーの間の相互作用の探求を容易にするものになっている(Grillitsch and Sotarauta 2020)。

### 3. 時間地理学からの示唆

人文地理学の学説史において、時間や経路、イノベーションというキーワードは、進化経済地理学が初出ではない。これらのキーワードを約半世紀前に巧みに用いて卓越した研究手法を確立したのが、スウェーデンの地理学者 Torsten Hägerstrand である。ルンド学派を先導した彼は、人口移動や空間的拡散、時間地理学の研究で名高く知られている(杉浦 2001)。

Henning (2019) は、組織的・制度的枠組の中で組織されたミクロレベルの過程を理論的に重視する点に、時間地理学と進化経済地理学との共通点を見出している。一方で、カップリングやバンドルという概念を通じて制約を重視する時間地理学に対して、進化経済地理学では制約による問題はあまり意識されていない(Henning 2019)。そこで、Henning (2019) は、時間地理学に基づき、時間の経過に伴う制約条件の変化が、進化経済地理学の中核的メカニズムである変異や淘汰、保持にどのような影響を与えるのか検討するように促し、より具体的にはポートフォリオとしての経路、イノベーションと拡散、経済的補完性の3点を提示している。

主に個人が分析対象の時間地理学に対して、進化経済地理学では主に企業などのアクターに着目するため、時間地理学の手法をそのまま適用することには困難な点も否めないが、時間の経過に伴う諸状況の変化を検討してきた時間地理学という先達の着想を活用することも考えるべきだろう。

### Ⅲ 歴史

#### 1. 経路依存性と歴史

進化経済地理学の鍵概念の1つである経路依存性は、過去と現在とを関係付け、歴史に関連する概念である。経路依存性は、「ある時点での制度的配置や、それ以前の経験・学習の影響を受けるため、ある時点以降の発展経路がそれ以前の発展経路の影響を受けること」（塩沢・清水 2006: 460）と定義される。進化経済地理学では、「地域の新たな成長経路は、ゼロから始まるのではなく、地域の歴史的な経済構造に強く根ざしたもの」（Neffke et al. 2011: 261）と考えられてきた。

経路依存性の理解をめぐる、論者によっては緩く捉えられやすい難点も抱えている。たとえば、比較政治学において経路依存性概念を考察した阪野（2006: 70）は、経路依存性が「単に、過去の時点での政策決定がその後の政策決定や方向性を規定する、といった意味でこの概念が用いられるケースも少なくない」としたうえで、「こうした広義の理解では、単に『歴史が問題になる』（history matters）という一般的な見解を言い表しているに過ぎなくなってしまう」と述べている。

経路依存性がしばしば歴史的決定主義として捉えられることに対する見解も提示されてきた。たとえば、Håkansson and Lundgren（1997: 123）は、「経路依存性は現在の全体が過去の全体から導出されるという歴史決定論を説くものではない」と論じ、「すべての道がローマに通じているわけではなく、道が道に通じているように、特定の経路を『選択』することがすべての違いを生む」と述べている。同様に、Walker（2000: 126）も、経路依存性は「技術や過去によって決定された厳格な連続を意味するのではなく、確立された方向が他方よりも一方に進みやすく、大規模な反転が困難になるロードマップを意味する」と論じている。

このような議論は、地理学において古典的な環境決定論－環境可能論を想起させて、既視感を覚えざるを得ない。地理学では、環境決定論から環境可能論

に移行したことで、自然環境は人間の意思決定・行動に影響する可能性の1つに過ぎなくなり、両者の因果関係の説明が従前よりも困難になったことが知られている。同様に捉えると、経路依存性は過去と現在とを結ぶ可能性の1つに過ぎなくなり、その概念に、より厳格な意味を与える必要がある。そのため、「経路依存性は経路の発生・開始に関わる過程と経路の再生産に関わる過程から構成されている」（阪野2006: 71）と捉えたり、経路依存性には状況依存性や自己強化、ロックインなどの過程が必要であることが提示されたりしている（Vergne and Durand 2010）。

## 2. 歴史認識へ向けて

Martin and Sunley (2022) は、期待されるほどには進化経済地理学が歴史を真剣に受け止めていないために、その現状を打破する糸口として、経営史学の Kipping and Üsdiken (2014) を基に、歴史的社会科学としての進化経済地理学を再考している。Kipping and Üsdiken (2014) は、経営史の実証研究の中での歴史を用いるアプローチを以下の3つに区分した。第1に、新理論を開発したり、既存理論を修正・テストしたりするために歴史を用いるのが「歴史から理論へ History to theory」である。この手法の1つとして、進化経済地理学では、多変量回帰分析がしばしば用いられてきたが、Martin and Sunley (2022) は時間の経過とともに変数間の因果関係が不変であるという前提には無理があることを指摘している。第2に、理論モデル自体に不可欠な部分としての過去を利用するのが「理論における歴史 History in theory」である。これは、「過程の先行条件や形式としての歴史そのものが、説明の原動力」になり、「このような理論は通常、時代を超越した一般的なものであると想定されるが、特定の時間的・空間的設定における経験的な出来事や関係を説明するために用いられる」（Martin and Sunley 2022: 68）。進化経済地理学で多くの論者が言及してきた経路依存性もこれに該当する。「歴史から理論へ」と「理論における歴史」の両アプローチには相互関係があり、後者は前者を検証するために用いられる（Martin and Sunley 2022）。第3に挙げられるのが「歴史認識 Historical cognizance」である。「歴史

から理論へ」の場合には、時代を超越した普遍的な解釈の枠組みではなく、特定の時代の影響を明示的に概念化した理論を検証し、「理論における歴史」の場合には、分析対象の実体や過程、関係の歴史的特殊性と状況依存性を理論的に理解することであり、これら理論的説明の一般化には限界が存在する (Martin and Sunley 2022)。これらを超えて歴史的文脈を真剣に受け止めるのが「歴史認識」であり、「原因過程を特定するための方法として、特定事例の歴史的展開に基づく真価のわかる理論化」(Martin and Sunley 2022: 68) を目指すものである。歴史認識の研究へ移行するために、Kipping and Üsdiken (2014) は、歴史がどのように利用されているかをより明確かつ思慮深くなること、時代の影響や歴史的状況依存性を認識すること、理論を重視する歴史家やその研究と交流することの3点を提案している。このように「歴史認識」を意識した研究の必要性が説かれている状況にあるといえる。

### 3. マルクス主義地理学と地理的政治経済学における歴史

「歴史認識」へ向けて端緒を開くために、本稿ではマルクス主義地理学における時間・歴史観に言及しておきたい。1980年代以降の英語圏におけるマルクス主義地理学は、グローバル化が進む中で語られてきた「時間-空間の圧縮」という言説<sup>6</sup>に対抗して、時間や歴史をめぐる様々な議論を蓄積してきた。その中心的論者である Harvey (1990a) は、空間と時間の経験を個人的かつ社会的なものとして再定置化するとともに、マルクス主義の理論的基盤の1つである史的唯物論に地理を組み合わせた史的・地理的唯物論を提唱している。同様に、Harvey (1990b) は、空間と時間に関する歴史地理学の構築を意図して、資本主義下の社会的再生産や地理的不均等発展に内在する歴史地理の含意を考察した。一方で、地域経済の構造を歴史的に形成された「諸層」の結合とみなして場所のユニークネスやロカリティの意義を強調したのが、Massey (1984) である。彼女は、「場所のアイデンティティを理解しようとするとき、時間から空間を、

<sup>6</sup> Urry (1995) は、社会学者や地理学者たちが時間と空間をどのように論じてきたのかを考察している。

あるいは歴史から地理を切り離すことはできないし、そうすべきではない」(Massey 1995: 187) と述べ、場所論において歴史を語る意味を論じている。そのうえで、彼女は「ある場所をひとつの整然とした『時間－空間の封筒』に封じ込めようとするのではなく、今、この場所に集まっているものは、多くの歴史と多くの空間が結びついたものであることを認識する理解方法」(Massey 1995: 191) が必要であると主張した。さらに、彼女が著した『空間のために』(Massey 2005) と題した書籍においても、共時性や瞬間性、異時性、通時性、歴史性、軌跡などの時間や歴史に関するキーワードが頻出するのが特徴的であり、時間や歴史に関する諸概念を用いて、現代的な空間や場所の問題を読み解く手段として模索していたことが読み取れる。

これらに対して、政治経済学を援用して地理を論じる地理的政治経済学は、経済空間に内在する権力関係や地理的不均等発展に着眼するものの (MacKinnon et al. 2009; Hassink et al. 2014)、マルクス主義を標榜しない故に理論的基盤が薄弱で、Hodgson (2009: 172) は「首尾一貫した構造化された理論体系というよりは、マルクス主義や他の荒廃したパラダイムの廃棄物から救済された素敵なアイデアのリサイクル箱」のようだと評している。それは史的唯物論への言及を回避するため、歴史に対する言及もあまり見られない。

経路創造や地域レジリエンスの議論では、発展や再生が進む地域への関心が高い一方で、世界中には回復や発展が見込みにくい「取り残された地域」も少なくなく、愛着のある場所を放棄せざるを得ない人たちもいる (Phelps et al. 2018; MacKinnon et al. 2022)。前述した議論も参照しながら、資本の論理が支配する「空間」と人々が生きる「場所」とがせめぎ合う相克の歴史を読み解く進化的な手法の確立も必要であろう。

#### IV むすび

本稿は、進化経済地理学における時間や歴史を用いた様々なアプローチを検討してきた。結びに本稿の内容をまとめ、展望を示したい。

時間に対するアプローチとして、以下の3つに言及した。第1に、地域レジリエンスの議論では、影響の持続期間の長さによって短期的・一時的な影響を与えるショックと、長期的・持続的な影響を与えるスローバーンが峻別されるとともに、地域レジリエンスを単一のショックからの回復過程だけではなく、地域の長期的進化に結び付ける議論の進展を指摘した。また、履歴効果をネガティブだけではなくポジティブにも捉えようとする議論の拡大についても取り上げた。長期的な時間の変化が短期的な時間の変化の積み重ねという単純な議論ではなく、ショックやスローバーン、履歴効果のような概念を用いて短期と長期とを結びつける手法の有用性が確認された。第2に、経路創造の議論では、一時性と機会空間の概念に着目した。エージェンシーを鍵概念とする経路創造論では、構造との関係を理論上において整理することが不可避であり、これらを媒介する概念として開発されてきた。第3に、時間地理学からの示唆として、時間の経過に伴う制約条件の変化を進化経済地理学でも考察対象に加えることが挙げられていた。

歴史に対するアプローチとして、以下の3つに言及した。第1に、進化経済地理学の鍵概念の1つである経路依存性について検討し、それは歴史決定主義ではなく、過去に依拠する可能性を示した議論であることが示された。第2に、経営史学の Kipping and Üsdiken (2014) が示した「歴史から理論へ」「理論における歴史」「歴史認識」の3つのアプローチに基づき、「歴史認識」の必要性が説かれている。第3に、マルクス主義地理学と地理的政治経済学における歴史への言及を検討し、空間と場所の歴史を読み解く進化的な手法を確立させていくことの必要性を主張した。

ショックやエージェンシーなどによって作用する短期的・一時的な変化は、長期的・持続的な変化や構造に影響を及ぼし、またそれは逆にも相互作用する。それら時間的な積み重ねを文脈的に把握するのが歴史であり、決定主義的立場をとらずに、過去と現在との関係を考察する必要があるといえる。進化論の特徴の1つは、事後合理的な解釈であるとされるが(藤本 1997)、経路依存性の議論を通じて地域の過去と現在との関係を事後合理的に論じるだけではなく、

経路創造の議論を通じて現在と未来との関係を予想的に論じる枠組の精緻化も求められる。それによって、進化経済地理学は、時間・歴史に対する空間・場所の科学へとさらなる進化を遂げることができるだろう。

本稿では、進化経済地理学における時間や歴史について論じてきた。これまでの進化経済地理学の研究蓄積に伴って、経済地理学への進化論的なアイデアの浸透は着実に進んできた。進化経済地理学が今後も進展していくかどうかは未知数であるが、「経済地理学における進化」(MacKinnon et al. 2009) は今後も継続的な進展が期待される。元来、地理学は、Karl Ritter や Paul Vidal de la Blache らの伝統以来、隣接学問の歴史学とは不可分の関係にある。地理学と歴史学との関係を論じながら歴史地理学の存在意義を雄弁に語った Baker (2003) などと対比させて、「経済地理学における進化」の学説史上の位置付けを大局的に提起していくことが今後も求められるだろう。

本研究は JSPS 科研費 JP 20H01397 の助成を受けたものである。

## 文献

- 大城直樹・丹羽弘一・荒山正彦・長尾謙吉 1993. 1980年代後半の人文地理学にみられるいくつかの傾向——イギリスの最近の教科書から. 地理科学 48 : 91-103.
- 阪野智一 2006. 比較歴史分析の可能性——経路依存性と制度変化. 日本比較政治学会年報 8 : 63-91.
- 塩沢由典・清水耕一 2006. 経路依存性. 進化経済学会編 『進化経済学ハンドブック』 460-461. 共立出版.
- 杉浦芳夫 2001. ヘーゲルシュトランド——現代地理学と近代地理学の邂逅. 竹内啓一・杉浦芳夫編『20世紀の地理学者』 178-188. 古今書院.
- 鈴木和歌奈 2013. 希望／期待から見る科学技術. 研究 技術 計画 28 : 163-174.
- 外柙保大介 2012. 進化経済地理学の発展経路と可能性. 地理学評論 85A : 40-57.
- 外柙保大介 2018. 『進化する企業城下町——進化経済地理学からのアプローチ』 古今書院.
- 堤 研二 1995. 産業近代化とエージェント——近代の八女地方における茶業を事例として. 経済地理学年報 41 : 171-191.
- 東大社研・玄田有史・宇野重規編 2009a. 『希望学1 希望を語る——社会科学の新たな地平へ』 東京大学出版会.
- 東大社研・玄田有史・中村尚史編 2009b. 『希望学2 希望の再生——釜石の歴史と産業が語

- るもの』 東京大学出版会.
- 東大社研・玄田有史・中村尚史編 2009c. 『希望学3 希望をつなぐ——釜石からみた地域社会の未来』 東京大学出版会.
- 東大社研・玄田有史・宇野重規編 2009d. 『希望学4 希望のはじまり——流動化する世界で』 東京大学出版会.
- 野尻 亘 2011. 時間地理学からみた構造化理論についての一考察——地理学における構造—主体論争とのかわりを中心として. 桃山学院大学社会学論集44 (2): 63-94.
- 野尻 亘 2013. 進化経済地理学とは何か. 人文地理 65: 397-417.
- 藤本隆弘 1997. 『生産システムの進化論——トヨタ自動車にみる組織能力と創発プロセス』 有斐閣.
- 森川 洋 1992. 地誌学の研究動向に関する一考察. 地理科学 47: 15-35.
- 山口守人 1965. 地理的慣性と開発. 歴史地理学紀要 7: 95-110.
- ローマー, D. 著, 堀 雅博・岩成博夫・南條 隆訳 2010. 『上級マクロ経済学 (原著第3版)』 日本評論社. Romer, D. 2006. *Advanced Macroeconomics*. 3<sup>rd</sup> ed. New York: Mac Graw-Hill.
- 脇田武光 1990. 立地論における歴史地理的慣性の用語について. 大東文化大学経済論集 51 (4): 85-109.
- Baker, A.R.H. 2003. *Geography and history: Bridging the divide*. Cambridge: Cambridge University Press. バイカー, A. 著, 金田章裕監訳 2009. 『地理学と歴史学——分断への架け橋』 原書房.
- Bækkelund, N.G. 2021. Change agency and reproductive agency in the course of industrial path evolution. *Regional Studies* 55: 757-768.
- Benner, M. 2023. Revisiting path-as-process: Agency in a discontinuity-development model. *European Planning Studies* 31: 1119-1138.
- Borup, M., Brown, N., Konrad, K. and van Lente, H. 2006. The sociology of expectations in science and technology. *Technology Analysis and Strategic Management* 18: 285-298.
- Boschma, R. 2015. Towards an evolutionary perspective on regional resilience. *Regional Studies* 49: 733-751.
- Boschma, R. 2017. Relatedness as driver of regional diversification: A research agenda. *Regional Studies* 51: 351-364.
- Boschma, R. and Frenken, K. 2018. Evolutionary economic geography. In *New Oxford handbook of economic geography*, ed. G. Clarke, M. Feldman, M. Gertler and D. Wojcik, 213-229. Oxford: Oxford University Press.
- Cellini, R. and Torrisci, G. 2014. Regional resilience in Italy: A very long-run analysis. *Regional Studies* 48: 1779-1796.
- Cerra, V. and Saxena, S. C. 2008. Growth dynamics: The myth of economic recovery. *American Economic Review* 98: 439-457.

- Corpataux, J. and Crevoisier, O. 2007. Economic theories and spatial transformations clarifying the space-time premises and outcomes of economic theories. *Journal of Economic Geography* 7: 285-309.
- Emirbayer, M. and Mische, A. 1998. What is agency? *American Journal of Sociology* 103: 962-1023.
- Ermakoff, I. 2017. Shadow plays: Theory's perennial challenges. *Sociological Theory* 35: 128-137.
- Fingleton, B., Garretsen, H. and Martin, R. 2012. Recessionary shocks and regional employment. *Journal of Regional Science* 52: 109-133.
- Frenken, K., Van Oort, F. and Verburg, T. 2007. Related variety, unrelated variety and regional economic growth. *Regional Studies* 41: 685-697.
- Friedman, M. 1993. The "plucking model" of business fluctuations revisited. *Economic Inquiry* 31: 171-177.
- Garretsen, H. and Martin, R. 2010. Rethinking (new) economic geography models: Taking geography and history more seriously. *Spatial Economic Analysis* 5: 127-160.
- Garud, R. and Karnøe, P. 2001. Path creation as a process of mindful deviation. In *Path dependence and creation*, ed. R. Garud, and P. Karnøe, 1-38. London: Lawrence Erlbaum Associates.
- Garud, R. and Karnøe, P. 2003. Bricolage versus breakthrough: Distributed and embedded agency in technology entrepreneurship. *Research Policy* 32: 277-300.
- Gherhes, C., Vorley, T., Vallance, P. and Brooks, C. 2022. The role of system-building agency in regional path creation: Insights from the emergence of artificial intelligence in Montreal. *Regional Studies* 56: 563-578.
- Giddens, A. 1984. *The Constitution of Society: Outline of the Theory of Structuration*. Cambridge: Polity Press. ギデンス, A. 著, 門田健一訳 2015. 『社会の構成』 勁草書房.
- Grillitsch, M., Asheim, B. and Trippel, M. 2018. Unrelated knowledge combinations: The unexplored potential for regional industrial path development. *Cambridge Journal of Regions, Economy and Society* 11: 257-274.
- Grillitsch, M., Asheim, B. and Nielsen, H. 2022. Temporality of agency in regional development. *European Urban and Regional Studies* 29: 107-125.
- Grillitsch, M., Rekers, J. V., and Sotarauta, M. 2021. Investigating agency: Methodological and empirical challenges. In *Handbook on city and regional leadership*, ed. M. Sotarauta, and A. Beer, 302-323. Cheltenham: Edward Elgar.
- Grillitsch, M. and Sotarauta, M. 2020. Trinity of change agency, regional development paths and opportunity spaces. *Progress in Human Geography* 44: 704-723.
- Håkansson, H. and Lundgren, A. 1997. Path dependence in time and space: Path dependence on industrial networks. In *Evolutionary economics and path dependence*. ed. L. Magnusson and J. Ottoson, 119-137. Cheltenham: Edward Elgar.
- Hamilton, J. D. 1989. A new approach to the economic analysis of non-stationary time series and the business cycle. *Econometrica* 57: 357-384.

- Harvey, D. 1990a. *The condition of postmodernity: An enquiry into the origins of cultural change*. Oxford: Blackwell. ハーヴェイ, D. 著, 吉原直樹監訳, 和泉 浩・大塚彩美訳 2022. 『ポストモダニティの条件』 筑摩書房.
- Harvey, D. 1990b. Between space and time: Reflections on the geographical imagination. *Annals of the Association of American Geographers* 80: 418-434. ハーヴェイ, D. 著, 堤 研二訳 1997. 空間と時間の間で — 地理学的想像力に関する省察. 空間・社会・地理思想 2: 54-78.
- Harvey, D. 1997. Contested cities: Social process and spatial form. In *Transforming cities: Contested governance and new spatial divisions*. ed. N. Jewson and S. MacGregor, 19-27. London: Routledge.
- Hassink, R., Klaering, C. and Marques, P. 2014. Advancing evolutionary economic geography by engaged pluralism. *Regional Studies* 48: 1295-1307.
- Henning, M. 2019. Time should tell (more): Evolutionary economic geography and the challenge of history. *Regional Studies* 53: 602-613.
- Hodgson, G.M. 2009. Agency, institutions, and Darwinism in evolutionary economic geography. *Economic Geography* 85: 167-173.
- Kaldor, N. 1978. *Further essays on economic theory*. London: Duckworth. カルドア, N. 著, 原 昭五・高木邦彦訳 1989. 『経済成長と分配理論 — 理論経済学統論』 日本経済評論社.
- Kipping, M. and Üsdiken, B. 2014. History in organisation and management theory: More than meets the eye. *Academy of Management Annals* 8: 535-588.
- Kurikka, H., Kolehmainen, J., Sotara, M., Nielsen, H. and Nilsson, M. 2023. Regional opportunity spaces - observations from Nordic regions. *Regional Studies* 57: 1440-1452.
- Lee, C.-K. and Saxenian, A. 2007. Coevolution and coordination: A systemic analysis of the Taiwanese information technology industry. *Journal of Economic Geography* 8: 157-180.
- Lui, Z. 2009. Bringing history into evolutionary economic geography for a better understanding of evolution. *Papers in Evolutionary Economic Geography* 09/01, Urban and Regional Research Centre, Utrecht University.
- MacKinnon, D., Cumbers, A., Pike, A., Birch, K. and McMaster, R. 2009. Evolution in economic geography: Institutions, political economy, and adaptation. *Economic Geography* 85: 129-150.
- MacKinnon, D., Kempton, L., O'Brien, P., Ormerod, E., Pike, A., and Tomaney, J. 2022. Reframing urban and regional 'development' for 'left behind' places. *Cambridge Journal of Regions, Economy and Society* 15: 39-56.
- Mah, H. 2012. *Industrial ruin, community, and place: Landscapes and legacies of urban decline*. Toronto: University of Toronto Press.
- Martin, R. 2012. Regional economic resilience, hysteresis and recessionary shocks. *Journal of Economic Geography* 12: 1-32.
- Martin, R. and Gardiner, B. 2019. The resilience of cities to economic shocks: A tale of four recessions (and the challenge of Brexit). *Papers in Regional Science* 98: 1801-1832.

- Martin, R. and Sunley, P. 2007. Complexity thinking and evolutionary economic geography. *Journal of Economic Geography* 7: 573-601.
- Martin, R. and Sunley, P. 2015a. On the notion of regional economic resilience: Conceptualization and explanation. *Journal of Economic Geography* 15: 1-42.
- Martin, R. and Sunley, P. 2015b. Towards a developmental turn in evolutionary economic geography? *Regional Studies* 49: 712-732.
- Martin, R. and Sunley, P. 2022. Making history matter more in evolutionary economic geography. *ZFW - Advances in Economic Geography* 66: 65-80.
- Martin, R., Sunley, P., Gardiner, B. and Tyler, P. 2016. How regions react to recessions: Resilience and the role of economic structure. *Regional Studies* 50: 561-585.
- Massey, D. 1984. *Spatial divisions of labour*. London: Macmillan. マッシイ, D. 著, 富樫幸一・松橋公治監訳 2000. 『空間的分業——イギリス経済社会のリストラクチャリング』古今書院 (翻訳は原著1995年発行の第2版).
- Massey, D. 1995. Places and their pasts. *History Workshop Journal*: 39: 182-192.
- Massey, D. 2005. *For space*. London: Sage. マッシイ, D. 著, 森 正人・伊澤高志訳 2014. 『空間のために』月曜社.
- Miörner, J. 2022. Contextualizing agency in new path development: How system selectivity shapes regional reconfiguration capacity. *Regional Studies* 56: 592-604.
- Myrdal, G. 1957. *Economic theory and under-developed regions*. London: Gerald Duckworth. ミュルダール, G. 著, 小原敬士訳 1959. 『経済理論と低開発地域』東洋経済新報社.
- Neffke, F., Henning, M. and Boschma, R. 2011. How do regions diversify over time? Industry relatedness and the development of new growth paths in regions. *Economic Geography* 87: 237-265.
- Pendall, P., Foster, K. A. and Cowella, M. 2010 Resilience and regions: Building understanding of the metaphor. *Cambridge Journal of Regions, Economy and Society* 3: 71-84.
- Phelps, N. A., Atienza, M. and Arias, M. 2018. An invitation to the dark side of economic geography. *Environment and Planning A* 50: 236-244.
- Schumpeter, J.A. 1942. *Capitalism, Socialism, and Democracy*. New York: Harper & Row. シュンペーター, J.A. 著, 大野 一訳 2016. 『資本主義, 社会主義, 民主主義 I・II』日経BPクラシックス.
- Scott, A.J., and Storper, M. 1987. High technology industry and regional development: a theoretical critique and reconstruction. *International Social Science Journal* 39: 215-232.
- Sewell, W. H. 2008. The temporalities of capitalism. *Socio-Economic Review* 6: 517-537.
- Sotarauta, M. and Grillitsch, M. 2023. Path tracing in the study of agency and structures: Methodological considerations. *Progress in Human Geography* 47: 85-102.
- Steen, M. 2016. Reconsidering path creation in economic geography: Aspects of agency, temporality and methods. *European Planning Studies* 24: 1605-1622.
- Storm, A. 2014. *Post-industrial landscape scars*. New York: Palgrave Macmillan.

- Storper, M. and Walker, R. 1989. *The capitalist imperative: Territory, technology and industrial growth*. New York: Basil Blackwell.
- Urry, J. 1995. *Consuming places*. London: Routledge. アーリ, J. 著, 吉原直樹・大澤善信監訳 武田篤志・松本行真・齊藤綾美・末良 哲・高橋雅也訳 2003. 『場所を消費する』 法政大学出版局.
- Vergne, J-P. and Durand, R. 2010. The missing link between the theory and empirics of path dependence: Conceptual clarification, testability issue, and methodological implications. *Journal of Management Studies* 47: 736-759.
- Vernon, R. 1966. International investment and international trade in the product cycle. *The Quarterly Journal of Economics* 80: 190-207.
- Walker, R. 2000. The geography of production. In *A companion to economic geography*, ed. E. Sheppard and T.J. Barnes, 113-132. Oxford: Blackwell.